青年期における個人主義 / 集団主義の相違がもたらす家族機能に関する探索的研究

小　原　眞知子　・　廣　瀬　圭　子
LO, Herman H. M.　・　浅　野　伸　彦

Exploratory Research on Family Functions Caused by Differences between Individualism and Collectivism in Adolescence

Machiko Ohara　・　Keiko Hirose
Herman H.M. Lo　・　Nobuhiko Asano

Abstract: [Purpose] Influenced by the rapid globalization in recent years, families in East Asia, where traditional family functions were thought to remain, are now entering a period of change. The purpose of this study was to clarify the characteristics of differences between individualism and collectivism in adolescence in terms of family function. This is part of a study conducted jointly by the Consortium of Institutes on Family in the Asian Region (CIFA) and the Japan Society for Family Research and Family Therapy.
[Method] The subjects were middle and high school students (792 people) aged 18 to 12 living in the Kanto, Kansai, and Kyushu and Okinawa regions. The survey method was analyzed by a group survey using a self-administered questionnaire.
[Result] The number of adolescents with individualism was 410 (51.8%) and collectivism consisted of 382 subjects (48.2%). In other words, the two groups had similar rates. In addition, the "family function" rate was significantly higher in the group than in the individual. The subjects were divided into four groups: vertical individualism, horizontal individualism, vertical collectivism, and horizontal collectivism. As a result, in all five family functions: (1) Adaptability, (2) Partnership, (3) Growth, (4) Affection, and (5) Resolve, vertical collectivism had the highest average and horizontal collectivism was the second highest.
[Conclusion.]From the above, it can be concluded that a high tendency toward collectivism in adolescence has a positive effect on family function compared with that of individualism. It was also suggested that individualism and collectivism should not be judged uniformly even if living in the same country, and that individualization should be promoted during adolescence.
Key Words: adolescence, individualism and collectivism, family function

要約：【目的】近年の急速なグローバル社会化の影響により、これまで伝統的家族機能が残存していると考えられていた東アジアにおいても、変革の時期を迎えていると考えられる。本研究では、個人の個人主義 / 集団主義の相違が家族機能にもたらす特徴を明らかにすることを目的とした。これは、Consortium of Institutes on Family in the Asian Region（CIFA）と日本家族研究・家族療法学会が共同して、実施した調査の一部である。【方法】日本では関東、関西、九州・沖縄に居住する 12 歳以上 18 歳以下の中学生・高校生（792 名）を対象に自己記入式質問紙による集合調査を実施し分析した。【結果】青年期の若者の個人主義は、410 人（51.8％）、集団主義は、382 名（48.2％）とほぼ 1 対 1 の割合であった。また、集団主義の者は、個人主義の者と比べ「家族機能」が、有意に高かった。縦型－横型個人主義縦型－横型集団主義の 4 種類に分類し、それぞれを高低の 2 群に分け、「家族機能」を t 検定で比較した。その結果、５つの家族機能すべてにおいて、縦型集団主義が最も平均値が高く、次いで横型集団主義であった。【結論】以上のことから青年期においては、集団主義の傾向が高い場合は個人主義のそれと比較して、家族機能にプラスの影響を与えていると言えよう。また文化的パターンが多様化している時代であり、同じ国に住んでいても、個人主義／集団主義は画一的に判断されるものではなく、そこから影響を受ける青年期の若者のコミュニケーションの方法や、他者との関係性のあり方は個別的に理解される必要性の根拠が示された。
キーワード：青年期、個人主義 / 集団主義、家族機能

Ⅰ　研究の背景と目的

―個人主義 / 集団主義とは―

個人主義 / 集団主義の概念が概観すると、主に心理学の領域から発展している。例えば、心理学的研究からトリアンデスは、これらを社会的パターンから捉え、それぞれの相違を示している[1]。また、社会心理学的研究から、ホフステードは、勤労観の調査から（Hofstede, 1983）4つの価値観として尺度を抽出し、その中に「個人主義 / 集団主義（individualism/collectivism）」を提唱した[2]。1990年前後には、自己の視点から、文化的価値観を比較するものとして、これを個人レベルの価値観に応用した「他者中心・自己中心」という概念や、自分と他人との関係が「独立的」なのか「依存的」かが、自分の認識や他者との関係に影響するとした「自他関係規定」[3]という概念などが生み出された。シンゲルやトリアンデスらはこれまでの次元に他人との関係の中で競争や格差を容認するかしないかの次元を組み込み4つに分類した。すなわち、「縦型個人主義（horizontal individualism）・横型個人主義（vertical individualism）／縦型集団主義（horizontal collectivism）・横型集団主義（horizontal collectivism）」である。[4] 本稿では、この概念を他人との競争を問題視せず、個人の利益を優先させる「縦型個人主義」、個人主義的ではあっても周囲の人々につぶされないように行動する「横型個人主義」、他人との格差を容認し、個人の都合を犠牲にして集団の利益を優先させる「縦型集団主義」、他人と横並びであることを重視する「横型集団主義」の価値観があるとした。[5]

一般的に日本社会は集団主義性が強調されていたが、昨今の若者の中には、個食、個室、制服や校則の自由化を求める動きなど、「個人」が主張される時代になってきた。これは、ミクロレベルだけではなく、新自由主義の台頭により、小さな政府や民営化、そして大幅な規制緩和、市場原理主義の重視などマクロレベルでの動向により、前述した若者の個人主義を後押ししているように思える。さらにこの現状は、社会福祉の領域においても公的サービスの活用だけではなく、「自助」や「自立」を強調する社会的仕組みへと変化している。このようなマクロの現象が、若者の個人主義 / 集団主義の傾向に影響を与えているのであろうか。

―個人主義 / 集団主義と文化的パターン―

個人主義 / 集団主義の概念は文化レベルの変数として、文化が人々の生活にどのような影響を与えるかを理解するために用いられてきた。この概念は異文化間コミュニケーションの分野で用いられ、文化の違いを説明する際に最も用いられる概念とされている。マーキン（2015）によると、この個人主義 / 集団主義は、コミュニケーションの基盤にある基本的価値を反映している「文化的パターン」として捉えられて、文化的規範を形成している[6]とされている。すなわち、この文化的パターンはコミュニケーションにも反映される。このことはビジネス関係にもあてはまり、双方の価値観の共有が重要であるとしている。特に日本人はビジネス交渉時の前に、社交的な時間を費やすのも、コミュニケーションをとる一つの方法でありこれが文化的規範になっていると指摘している。[7] 個人主義と集団主義の研究から明らかになっているのは課題解決のコミュニケーション方法である。たとえば、個人主義は自らのアイデンティティに

基づき、何かに対応する場合、人権意識と自己管理をすることを好むとされている[8]。一方、集団主義は社会システムのアイデンティティにもとづき、社会的状況を円滑にし、人々が集団に溶け込むように働きかけ、共感し、相互依存を好むとされている[9]。つまり集団主義は集団から追放されることを恐れ、輪の中にいることに安心感を覚えることになる。ホフステード(2001)やリ（2006）は、個人主義の場合は、問題を「協議」して対応する行動をするが、集団主義の場合は、状況を和らげ、「調和」のとれた非対立的な雰囲気を作り出し対応することが研究から提示されている。[10] [11] 双方の文化的パターンが異なる場合は、根本的な文化的価値を識別し、理解することが重要であるとしている。[12]

個人主義は直接コミュニケーションを好むのに対し、集団主義は間接的コミュニケーションを好むことが明らかになっている。直接的なコミュニケーションには、論理的な視点、直接的な指示、そして表現力を含むメッセージを相手に伝える傾向があることは自明であるが、[13] ホフステード（1983）は、個人主義は集団の利益よりも、自身の利益や幸せを促進するためにこの方法を取り得るとしている。[14] 双方向で行われる直接的コミュニケーションが、戦略的であり関係性を十分に考慮しない場合、双方に対立が生まれることもしばしばある。これは、いわゆる移民の多い米国などに代表されるように、多文化、多民族、多様な価値観で構成されている国々にみられる傾向であり、「ローコンテクスト」の社会にみられるとされている。

一方、集団主義は、相互作用の間に調和を求める傾向があり、時としてコミュニケーションパターンはあいまいであるが、それを用いることにより、非対立的であり、間接的なコミュニケーション戦略を用いて、信頼関係の構築を重視するとしている。結果的に平和的な解決策と調和を求めるコミュニケーションを好むこととされている。[15] これは、移民など他の人種が少ない、いわゆる単一民族や単一国家に近い国々であり、ある意味クローズドな環境の中で醸成され、価値観が似通っている人々が集まっている国々にみられる傾向である。つまり相手の空気を読み取り、相手の立場やその場の状況を配慮してコミュニケーションが成立する「ハイコンテクスト」社会にみられるとされている。[16] 以上のことから、個人主義 / 集団主義の傾向は文化的パターンとして人々の生活に影響を与え、人々のコミュニケーションのパターンを形成し、それが家族、地域、社会のシステムに作用している。

―わが国の個別主義 / 集団主義の傾向と青年期の家族に与える影響―

日本はガラパゴスに揶揄されたごとく、このハイコンテクスト文化であると言われているが、近年のグローバル化や社会情勢を鑑みると、実際にそうであろうかという疑問も残る。これに対して、高野らは日本人が集団主義であるという通説に対して、一石を投じ論じている。[17] 多くの研究論文を丹念に精査した彼らの研究によると、「全体としては、統制された実証的比較研究は、日本人の方が米国人より集団主義的であるとする通説を支持していないとみるべき」[18] として、これは認知的バイアスによって形成された可能性を示唆している。山岸(2010)は、社会心理学の視点から、日本人は集団主義ではないが、社会の仕組みが集団主義的な行動をとることを強いており、それによって、個人は利益を得るから、集団主義のように見えると述べている[19]。また杉万は、「かつて日本人ブームで論じられた日本人の集団主義は、現在明らかに

崩壊しつつある」[20] と述べているが、それは個人主義 / 集団主義という二極化したものではなく、また個人主義と断定するものでもなく、現代の日本社会を“ゆるやかな個人主義”に向かうトレンドであるとし、集団主義の崩壊を個人主義化（個人化）ではなく、「個別化」として表現するのが適当であろうと述べている。[21] 本稿においては、日本の若者は必ずしも集団主義であるとは捉えず、日本の歴史の中で育まれてきた集団主義と昨今のグローバル化に伴う社会変化の中で、個人主義に移行しつつある過渡期であると捉える立場をとる。

この個人主義 / 集団主義が青年期の家族に、そして若者自身に影響を与えるのだろうか。現在の日本社会の家族事情は、未婚率の上昇、離婚率の上昇、社会的孤立、孤独死など家族の個人化・多様化ともいえる現象が生じている。これは個人主義が家族の個人化を促進しているかの如く捉えられている。特にポストモダン以降の家族は曖昧さ、不安定性と多様性[22] は、これまでの近代家族的親子関係から、親も子も個人化が顕著になったことを示している。家族療法の立場からは、家族の成員の誰かが問題を抱えた時、それは個人の問題として捉えるのではなく、家族システムの問題として捉えるが、その家族システムも社会システムから文化的特質の影響を受けることになる。この観点から、前述した文化的パターンとしての個人主義 / 集団主義の傾向が親－子関係に影響を与えていると考えられ、これが家族機能にも影響を与えているのではないかと考える。特に、青年期の子どもにとっては、親－子という二者関係が変化していくプロセスは、自我機能の観点からきわめて重要である。自我が健全に発達していく一つの条件として、家族機能の高低が作用すると言われている。家族機能が不十分である家族は、自我発達と社会適応上の問題を招くとされている。一方、児島（2016）は、家族は若者に社会や文化的特質の影響を与える要因であるとしながらも、原家族が「機能不全家族」であっても青年は成長していくプロセスで自己を支えるあり方を身につけ、社会の中で生きていくことができる[23] とし、外的要因に対応してレジリエンスを高め、適応していく力を持っていることを示している。

以上のことをふまえて、本稿の目的は、個人主義 / 集団主義が若者の家族機能に及ぼす影響を探る。ここで用いる青年期（adolescence）は様々な年齢区分があるが、ここでは調査国を統一して、12 歳以上 18 歳未満とした。尚、本調査はアジア地域の家族協会 Consortium of Institutes on Family in the Asian Region（CIFA）と日本家族研究・家族療法学会が共同して、「アジアにおける青年期の家庭生活・QOL（生活の質）に関する調査（A study on adolescent perceived family functioning and quality of life in Asia）である。これは、香港、台湾、中国（上海）、中国（広東）、マレーシア、シンガポール、日本の 7 つの地域で実施された。本稿では日本の調査の一部を使用し、報告する。

Ⅱ　調査方法

1．調査方法と調査手順

本調査は、わが国の青年期の人生の豊かさと家庭生活を明らかとするために（関東、関西、九州・沖縄）に居住する 12 歳以上 18 歳以下の中学生・高校生（792 名）を対象に自己記入式

質問紙による集合調査を実施した。（当該地域の学校長を通じ、実施したため回収率は100％であった。）

２．アジアにおける青年期の家庭生活･QOL（生活の質）に関する質問紙（日本語版）の作成

調査に用いた質問紙は、上述したアジア地域の家族協会 Consortium of Institutes on Family in the Asian Region（CIFA）と日本家族研究・家族療法学会が共同して実施した、「アジアにおける青年期の家庭生活・QOL（生活の質）に関する調査（A study on adolescent perceived family functioning and quality of life in Asia）で作成したものである。全体の回収された3593人が分析対象者となった。基本的属性に関しては、年齢、性別、学年、家族の数を設定した。5つの尺度を使用したが、本稿では、日本の調査分析において以下の２つの尺度を用いる。

① Family functioning: Family APGAR Scale（Smilkstein, 1978）[24]

② Horizontal and vertical dimensions of individualism and collectivism:：（Shingelis, Triandis, & Gelfand 1995）[25]

以上の尺度は英語で作成されたものであり、これを英語に精通している研究協力者が和訳したものを、筆者と日米語バイリンガルが修正を行い、12人の青年期の若者にパイロットスタディを実施した。その上で表現方法を青年期の若者が理解できる日本語に再修正して、本調査で使用する日本語版を作成した。

１）家族機能（Family APGAR Scale）の質問項目

質問項目は、質問によって、自分や自分の家族に関する考え方を、「１．何か私にトラブルがあったら、家族のもとに戻ることができるので満足である」「２．家族が何か相談したり、問題を共有したりするやり方に満足している。」など、適応性、パートナーシップ、成長、愛情、協調の５項目について「ほとんどいつも」「たまに」「ほとんどない」の３段階で求めた。

２）個人主義／集団主義の質問項目

個人主義／集団主義についての考え方は、横型－個人主義、縦型－個人主義、横型－集団主義、縦型－集団主義の４種類で構成されており、「他人よりもむしろ自分自身のことを信頼しています」など16項目について「まったくそうでない」から「いつもそうである」の９段階で求めた。

３．個人主義／集団主義の意識の違いによる特徴

因子分析の結果を踏まえ、項目毎の合計得点を算出し、6以上を「個人主義」群、6未満を「集団主義」群に２分し、それぞれの群ごとに「家族機能」をｔ検定で比較した。

なお、全ての統計解析には、統計解析ソフト「SPSS　21.0J」を使用した。

4．倫理的配慮

調査は、自己記入式質問紙による集合調査法を用いた。回収は、対象者のプライバシーの保持のため、質問紙は無記名とした。調査期間は、2017 年 11 月から、2018 年 2 月であった。なお、本調査は、香港理工大学倫理小委員会から 2018 年 6 月に（HSEARS20180103003）承認され、実施された。調査対象者には、研究データは本研究以外では使用しないこと、調査の拒否する権利、不利益を被らないことを書面にて明記し、それを保証した。

Ⅲ　結果

1．分析対象者の概要

分析対象者 792 名の概要は、表 1 に示す。性別は、男性 299 名（37.8％）、女性 475 名（60.0％）、不明が 18 名（2.3％）であった。学年は、中学 1 年が 58 名（7.3％）、中学 2 年が 65 名（8.2％）、中学 3 年が 58 名（7.3％）、高校 1 年が 477 名（60.2％）、高校 2 年が 117 名（14.8％）、不明が 17 名（2.1％）であった。年齢は、平均 17.51 歳（12 － 22;SD1.192）であった。家族の構成人数は、2 人家族が 22 名（2.8％）、3 人家族が 132 名（16.7％）、4 人家族が 274 名（34.6％）、5 人家族が 220 名（27.8％）、6 人家族が 80 名（10.1％）、7 人以上が 44 名（2.5％）であった。家族の構成人数の平均は、4.43 人（2 － 7；SD1.144）であった。

表 1　対象者の基本属性

性別	男性	299 名	37.8%	不明	18 名	2.3%
	女性	475 名	60.0%			
学年	中学 1 年	58 名	7.3%	不明	17 名	2.1%
	中学 2 年	65 名	8.2%			
	中学 3 年	58 名	7.3%			
	高校 1 年	477 名	60.2%			
	高校 2 年	117 名	14.8%			
家族の構成人数	2 人家族	22 名	2.8%			
	3 人家族	132 名	16.7%			
	4 人家族	274 名	34.6%			
	5 人家族	220 名	27.8%			
	6 人家族	80 名	10.1%			
	7 人以上	44 名	2.5%			

2．尺度の因子構造

分析にあたり、本研究で利用した尺度について、その信頼性と基礎統計量を算出した。各尺度については、項目合計点を尺度得点としている。その結果を、表 2 に示す。

表 2　各測定尺度の平均値と因子構造、SD および α 係数

	因子数	平均値	標準偏差	α
家族機能	1	6.97	2.641	0.862
個人主義 / 集団主義の傾向	4	92.23	18.968	0.841

1）家族機能

5項目の因子構造を確認するために、探索的因子分析（主因子法･プロマックス回転）を行った結果十分な因子負荷量であった。1因子構造が確認され、α 信頼性係数は、α =0.862であった。

2）個人主義 / 集団主義の傾向

16項目の因子構造を確認するために、探索的因子分析（主因子法･プロマックス回転）を行った結果十分な因子負荷量であった。先行研究と同様に4因子構造が確認され、尺度全体の α 信頼性係数は、α =0.841であった。第1因子「横型－個人主義」である4項目の α 信頼性係数は、α =0.680、第2因子「縦型－個人主義」である4項目の α 信頼性係数は、α =0.661、第3因子である4項目の α 信頼性係数は、α =0.868、第4因子である4項目の α 信頼性係数は、α =0.836であった。

3．日本の青年期の個人主義 / 集団主義の相違による家族機能の特徴

1）個人・集団主義の傾向の概要

各領域の合計点の平均から、5点以上の者を「傾向が高い群」とし、傾向の高低の2群を算出した。その結果、「横型－個人主義」については、傾向が高い群が217人、低い群が547人であり、傾向が低い者が多かった。対して、「縦型－個人主義」は、傾向が高い群が563人、低い群が203人、「横型－集団主義」は傾向が高い群が605人、低い群が163人、「縦型－集団主義」は、傾向が高い群が561人、低い群が208人と、傾向が高い者が多かった。（表3）

表3　若者の個人 / 集団主義の傾向

		高い群		低い群		欠損値	
個人主義	「横型－個人主義」	217	(27.4)	547	(69.1)	28	(3.5)
	「縦型－個人主義」	563	(71.1)	203	(25.6)	26	(3.3)
集団主義	「横型－集団主義」	605	(76.4)	163	(20.6)	24	(3.0)
	「縦型－集団主義」	561	(70.8)	208	(26.3)	23	(2.9)

単位人（内%）

2）重視する個人・集団主義に対する傾向と家族機能の特徴

重視する個人・集団主義傾向の違いによる特徴を概観するために、「横／縦型－個人主義」を「個人主義」、「横／縦型－集団主義」を「集団主義」の2群とし、「個人主義」と「集団主義」それぞれの「家族機能」を t 検定で比較した。個人主義は、410人（51.8%）、集団主義は、382名（48.2%）と、約半数であった。分析の結果、2つの主義ともに、個人と集団意識主義傾向の高低による2群で有意な差が認められた。個人主義は、集団主義の者と比べ、「家族機能」が有意に低かった。結果を表4に示す。

表4　個人 / 集団主義の傾向得点の高低による比較

	全体（n=792）		個人主義（n=410）		集団主義（n=382）		
合計点数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値
家族機能	6.97	2.641	6.42	2.746	7.59	2.377	6.267**

次に、個人 / 集団主義尺度の 4 つの下位尺度ごとに、家族機能の得点の平均値を t 検定で比較した。（表５）

表５　個人 / 集団主義尺度の各下位尺度得点の平均値の比較

合計点数	家族機能合計得点			
	傾向	平均値	標準偏差	t 値
横型－個人主義	高い	2.57	0.111	2.717**
	低い	2.74	0.189	
縦型－個人主義	高い	7.09	2.609	2.222*
	低い	6.59	2.726	
横型－集団主義	高い	7.27	2.460	5.497**
	低い	5.99	3.006	
縦型－集団主義	高い	5.59	2.984	9.196**
	低い	7.49	2.297	

①横型 / 個人主義傾向の家族機能

「横型－個人主義」を高低の 2 群に分け、「家族機能」を比較した結果、家族機能は、有意な差が認められ（$p < 0.01$）、傾向が低い者の家族機能が高かった。

②縦型－個人主義傾向の家族機能

「縦型－個人主義」を高低の 2 群に分け、「家族機能」を比較した結果、家族機能は、有意な差が認められ（$p < 0.05$）、傾向が高い者の家族機能が高かった。

③横型－集団主義傾向の家族機能

「横型－集団主義」を高低の 2 群に分け、「家族機能」を比較した結果、家族機能は、有意な差が認められ（$p < 0.01$）、傾向が高い者の家族機能は高かった。

④縦型－集団主義傾向の家族機能

「縦型－集団主義」を高低の 2 群に分け、「家族機能」を比較した結果、家族機能は、有意な差が認められ（$p < 0.01$）、傾向が低い者の家族機能が高かった。

３）重視する個人・集団主義に対する傾向と家族機能の比較

個人主義 / 集団主義の傾向の相違が家族機能に及ぼす影響についてさらに、詳細に検討するため、4 つの重視する個人・集団主義の傾向の相違と家族機能の 5 つの下位尺度得点について、t 検定で比較した。その結果、①適応性、②パートナーシップ、③成長、④愛情、⑤協調、の 5 つ家族機能すべてにおいて、縦型－集団主義が最も平均値が高く、次いで横型－集団主義、であった。（表６）

表６　重視する個人・集団主義の傾向と家族機能の下位尺度得点の比較

	①横型－個人主義			②縦型－個人主義			③横型－集団主義			④縦型－集団主義		
傾向	平均値	標準偏差	t 値	平均値	標準偏差	t 値	平均値	標準偏差	t 値	平均値	標準偏差	t 値
Q1 何か私にトラブルがあったら、家族のもとに戻ることができるので満足である。【適応性】												
高い群	1.41	0.028	2.551*	1.40	0.638	1.981*	1.41	0.636	2.979**	1.46	0.608	6.065**
低い群	1.28	0.045		1.29	0.690		1.23	0.693		1.13	0.696	
Q2 家族が何か相談したり、問題を共有したりするやり方に満足している。【パートナーシップ】												
高い群	1.30	0.676	2.779**	1.28	0.689	有意差なし	1.30	0.668	3.689**	1.35	0.629	6.425**
低い群	1.14	0.688		1.17	0.688		1.07	0.721		0.97	0.754	
Q3 私の家族は、私が新しい活動をすることや新しい方向を目指すために、私の願いを受け入れてくれ、サポートしてくれるので満足している。【成長】												
高い群	1.59	0.593	2.13*	1.59	0.581	2.732**	1.62	0.563	5.198**	1.65	0.527	7.762**
低い群	1.48	0.619		1.45	0.663		1.31	0.686		1.28	0.714	
Q4 家族が愛情を示し、私の怒り、悲しみ、愛といった感情に反応する方法に、私は満足している。【愛情】												
高い群	1.35	0.669	有意差なし	1.33	0.678	有意差なし	1.39	0.646	4.484**	1.44	0.629	7.108**
低い群	1.26	0.699		1.29	0.697		1.09	0.767		1.03	0.727	
Q5 家族一緒に時間をともに過ごす方法に、私は満足している。【協調】												
高い群	1.50	0.644	有意差なし	1.50	0.655	有意差なし	1.54	0.620	4.668**	1.60	0.588	8.410**
低い群	1.42	0.694		1.41	0.672		1.27	0.750		1.17	0.729	

①【適応性】に関する家族機能の平均得点

4 つの個人主義 / 集団主義のうち、最も家族機能の適応性に関する平均得点が高かったのは、「縦型－集団主義」の 1.46 であり、次いで、「横型－集団主義」「横型－個人主義」の 1.41、「縦型－個人主義」の 1.40 の順であった。

②【パートナーシップ】に関する家族機能平均得点

4 つの個人主義 / 集団主義のうち、最も家族機能のパートナーシップに関する平均得点が高かったのは、「縦型－集団主義」の 1.35 であり、次いで、「横型－集団主義」「横型－個人主義」の 1.30、「縦型－個人主義」の 1.28 の順であった。

③【成長】に関する家族機能平均得点

4 つの個人主義 / 集団主義のうち、最も家族機能の成長に関する平均得点が高かったのは、「縦型－集団主義」の 1.65 であり、次いで、「横型－集団主義」の 1.62、「横型－個人主義」「縦型－個人主義」の 1.59 の順であった。

④【愛情】に関する家族機能平均得点

4 つの個人主義 / 集団主義のうち、最も家族機能の愛情に関する平均得点が高かったのは、「縦型－集団主義」の 1.44 であり、次いで、「横型－集団主義」の 1.39、「横型－個人主義」の 1.35、「縦型－個人主義」の 1.33 の順であった。

⑤【協調】に関する家族機能平均得点

4 つの個人主義 / 集団主義のうち、最も家族機能の協調に関する平均得点が高かったのは、「縦型－集団主義」の 1.60 であり、次いで、「横型－集団主義」の 1.54、「横型－個人主義」「縦型－個人主義」の 1.50 の順であった。

【考察】

本調査で対象になった若者の個人主義 / 集団主義の相違と関連する家族機能の特徴をとらえるために、利用した尺度に関しては、個人主義 / 集団主義の尺度は 4 因子、家族機能は 1 因子であり、信頼性の高いものであることが示された。個人主義 / 集団主義の傾向を把握するために、尺度の合計点数の平均から 5 点以上のものを傾向が高い群として、傾向の高低の 2 群を算出した。その結果、横型－集団主義、縦型－個人主義、縦型－集団主義に高い傾向を示す 3 つグループが存在した。すなわち、他の人々と横並びであることを重視する横型－集団主義の傾向が高いグループ、他人との競争を問題視せず自己の利益を優先させる縦型－個人主義の傾向が高いグループ、自己の利益よりも集団の利益を優先させる縦型－個人主義の傾向が高いグループである。また、個人主義であっても周りにつぶされないように振舞う、いわゆる横型－個人主義については、高い傾向を示す者は少なかった。これは、前述した杉万（2010）が述べているように、現代の個人主義 / 集団主義の二極化ではなく、まさに混沌とした状態として、ゆるやかな個人主義へのトレンドに向っている過渡期であるともいえる。また、今回の対象者は高校受験を経験したばかりの高校一年生が多かったことも影響しているかもしれない。この年齢層は、青年期特有の両親などの重要な他者から内的に分離し始め、自分の興味関心と社会的な現実とを協応させていく時期であり、今回の調査は彼らの傾向を断定したものではなく、今後も変化していく可能性があると言えよう。

今回の調査による若者の個人主義 / 集団主義と相違による家族機能の特徴としては、個人主義と集団主義の高低による 2 群で有意な差が認められ、集団主義は、個人主義の者と比べ、家族機能が有意に高かったことから、2 つの傾向は家族機能に影響を与えていることが示唆された。しかし、これをそれぞれ高低の 2 群に分けて、詳細に検討した結果、特に横型－集団主義の家族機能の平均値は高い。これはカザリアン（2005）[26] が示した 4 つの類型の中で、横型－集団主義は家族機能と最も強い関連を有しているとしており、今回の調査では、有意差検定は行っていないものの、その結果は興味深いものであった。さらに、個人／集団主義の傾向の相違と家族機能の 5 つの下位項目との関連から、横型／縦型集団主義の両者では、それぞれ高い群は低い群に比べて、「適応性」、「パートナーシップ」、「成長」、「愛情」、「協調」のすべての項目でそれぞれ高値であった。また、すべての項目において、各項目の高い群と低い群との有意差が認められた。とりわけ縦型－集団主義が最も平均値が高かった。また、横型／縦型個人主義の双方では、それぞれ高い群は低い群に比べて、「適応性」と「成長」の項目との有意差が認められた。「適応性」と「パートナーシップ」に関しては、横型－集団主義と横型－個人主義の、横型タイプが、同じ得点傾向を示したことから、横型の特性と家族機能との関連性が示唆された。

以上のことから、青年期においては、集団主義の傾向が高い場合は個人主義のそれと比較して、家族機能に影響を与えていることが明らかになった。これは、一般的にネガティブにとらえられがちな集団主義をあらためて問い直すことも必要ではないかと考える。加えて、昨今の若者の不安定さや多様化の現象から、これは必ずしも画一的なものとして捉えるのではなく、各々の家族と若者自身が持つそれぞれの文化的パターンを尊重する必要が示唆された。一方で

は、日本人は集団主義であるという了解を見直す時期にあり、文化的パターンが多様化している時代であり、同じ国に住んでいても、個人主義／集団主義は画一的に判断されるものではなく、そこから影響を受ける青年期のコミュニケーションの方法や他者との関係性の構築においても、個別的に理解される根拠が示された。

本調査の限界は、青年期である対象者のサンプリングが偏っていたことは否めない。今後、更に多くの協力者からデータを集め、調査を重ねることにより、その妥当性を高めることができると考える。

最後に、本研究にご協力いただいた各学校関係者ならびにアンケートに回答してくださった学生の皆さまには心から感謝申し上げます。また、CIFA の研究メンバー、本研究をサポートしてくださった日本家族研究・家族療法学会の皆様に感謝の意を表します。

［参考文献・注］

1 トリアンデスは個人主義を「自らを集団とは独立していると考える，ゆるやかに結びついた諸個人から構成される社会的パターン」、集団主義は「自らを集団の部分と考える，緊密に結びついた諸個人から構成される社会的パターン」と定義している。Triandis, H.C.（1995）. Individualism and collectivism.Westview Press.（ トリアンディス，H.C. 神山 貴弥・藤原武弘（編訳）（2002）．個人主義と集団主義― 2つのレンズを通して読み解く文化北大路書房）

2 Hofstede, G. (1983) The Cultural relativity of organizational practices and theories; *Journal of International Business Studies,* Vol.14-2 pp75-89

3 Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*,98, 224-253.

4 Singelis, T. M., Triandis, I-I. C., Bhawuk, D. P. S 書， & Gelfand, M. J. (1995). A theoretical and measurement refinement. *Cross Cultural Research*, 29, 240-275.

5 大橋理枝 (2005)「日本人・アメリカ人の縦型 / 横型 - 個人主義 / 集団主義：日米差と世代差について」放送大学研究年報 22 巻 p112

6 Rebecca S. Merkin (2015). The relationship between individualism / collectivism : Consultation and Harmony Needs, *Journal of Intercultural Communication*, ISSN 1404-1634, issue 39

7 大橋理枝（2007）「縦型 / 横型―個人主義 / 集団主義の性差・地域差・年齢差について：放送大学の場合」放送大学研究年報 24 巻 p94

8 Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences: Comparing values, behaviors, institutions, and organizations across nations* (2nd ed.). London, England: Sage.

9 Bargiela-Chiappini, F. & Haugh, M. (2009). *Face, communication and social interaction.* London: Equinox.

10 Hofstede, G. (2001)

11 Li, C. (2006). The Confucian Ideal of Harmony. Philosophy East & West, 56(4), 583-603

12 Xizhen, Q. (2014). Exploring the Impact of Culture in Five Communicative Elements. *Journal of Intercultural Communication*, 34, 3.

13 Hammer, M. R., & Rogan, R. (2002). Latino and Indochinese interpretive frames in negotiating conflict with law enforcement: A focus group analysis. *International Journal of Intercultural Relations*, 26(5), 551-575

14 Hofstede, G. (1983). The cultural relativity of organizational practices and theories. *Journal of International Business Studies*, 14, 75-89.

15 Meng-Yu, L. (2009). On the Traditional Chinese Notion of "Harmony": Resources to the Intercultural Communication. *China Media Research*, 5(1), 55-58.

16 Meng-Yu, L. (2009).

17 高野陽太郎、櫻坂英子（1997）「“日本人の集団主義” －這説の再検討－」心理学研究　第68巻4号（The Japanese Journal of Psychology ,Vol. 68, No. 4）312-327

18 高野他（1997）　p323

19 山岸俊男.（2010）.『心でっかちな日本人—集団主義文化という幻想』. 筑摩書房

20 杉万俊夫（2010）「「集団主義－個人主義」をめぐる3つのトレンドと現代日本社会」ジャーナル「集団力学」27巻 p24

21 杉万（2010）p25

22 中野秀樹（1995）,「ポストモダン理論と核家族：トレヴァー・ノーブル（著）」京都社会学年報3、pp145-165　京都大学文学部社会学研究室　http://hdl.handle.net/2433/192511（最終閲覧日2019年9月9日）

23 児玉夏枝（2016）「青年期における自己の葛藤と家族機能との関連についての研究－対人恐怖的傾向・自己愛的傾向に着目して－」京都大学大学院教育学研究科紀要（2016）, 62：387-399

24 Smilkstein G. The Family APGAR: A proposal for a family function test and its use by physicians. J Fam Pract. 1978;6:1231–1239

25 Singelis, T. M., Triandis, I-I. C., Bhawuk, D. P. S , & Gelfand, M. J. (1995)

26 Kazarian, S. S. (2005). Family functioning, cultural orientation, and psychological well-being among university students in Lebanon. *The Journal of Social Psychology*, 145(2), 141-152.